

「ディスカッション: 震災と障害者の暮らし」

報告書



2008年11月

神奈川工科大学
ロボット・メカトロニクス学科
人間福祉・健康科学コース

小川研究室

「ディスカッション：震災と障害者の暮らし」

私たちは、いざという時のことはあまり気かけず、その備えも考えずに過ごしがちです。しかし、今年 2008 年に岩手・宮城内陸地震、それ以前には新潟県中越地震、阪神淡路大震災など多くの経験をしてきました。いざ私たちの身の回りに起きた場合にはどう対処したらいいのでしょうか。震災時に困難を覚える人たちの声を聞きながら、個人的な配慮・工夫を共有するとともに、社会的な課題も整理してみることにしました。

日時：2008 年 11 月 9 日（日）13:30～16:00

場所：神奈川工科大学 ロボット・プロジェクト棟（E3 号館）1 階



目次

第一部

問題提起「障害者に対する震災対策の一例」.....	1
神奈川県障害者自立支援センター事務局長 鈴木 治郎 氏	2

第二部

パネラー発言	5
みんなでつくる平塚 理事 山上 徳行 氏(車いすユーザー).....	5
神奈川聴覚障害者総合福祉協会 事務局長 坂上 譲二 氏	7
神奈川県視覚障害者情報・雇用・福祉ネットワーク 新村 真紀 氏	9
神奈川県手をつなぐ育成会 会長 依田 雍子 氏	11

ディスカッション.....	14
---------------	----

自閉症児をもつご家族

在日されている外国人の方とご家族

精神障害のある方、関係機関の方

高齢者福祉に関わる方

そのほか、震災時などに弱者となる可能性のある方々や支援者

資料	27
----------	----

『ディスカッション：震災と障害者の暮らし』

第一部



◆ 問題提起「障害者に対する震災対策の一例」

神奈川県障害者自立支援センター事務局長 鈴木 治郎 氏

◆ パネラー みんなでつくる平塚 理事 山上 徳行 氏(車いすユーザー)

神奈川聴覚障害者総合福祉協会 事務局長 坂上 譲二 氏

神奈川県視覚障害者情報・雇用・福祉ネットワーク 新村 真紀 氏

神奈川県手をつなぐ育成会 会長 依田 雍子 氏

問題提起「障害者に対する震災対策の一例」

神奈川県障害者自立支援センター事務局長 鈴木 治郎 氏

大きな被害の出る震災は、30年以内に起こる確立が80%以上だと言われています。「どうしたら良いだろう」と仲間と話をすると「このまま何もしない。死んでしまってもみんな一緒だから」ということをよく聞くのですが、実際にはそうはいきません。自分の身は自分で守るようにしなければいけないと思っています。

今日はスライドで、平成16年10月23日に起きた「新潟中越地震」、震度7クラスの地震だったのですが、一番怖かったのは余震で1年近くかなりの恐怖にさらされていた、と聞いています。

今の皆さんの状態はどうか最初に聞いておきたいのですが、普段から自分の家やアパートに水や食料を準備している方、手を挙げて下さい（大勢挙手）。次に自宅やアパートを耐震構造にされている、耐震対策をされている方は、どの位いるでしょうか。圧倒的に少ないですね。次に避難所ですが、地域や仕事場とかで自分の避難所を知っている方、これもパラパラですね。では、ここに居るこの学校の学生さんは何処に避難するのですか、避難所を知っていますか。なかなか分からないですね。だから準備をする必要があるのだとつくづく思います。では、次はちょっと難しくなりますが、家族や身内の人とちゃんと確認して避難するという方はいますか（ほとんどいない）。次は最後に伝言ダイヤルを使ったことがある人、お一人。実は、こうやって質問すると、ほとんどの人があまりやっていないですね、という私も全然やっていない、正直なところ。人間はほんとに差し迫った状態にならないと、なかなか行動しない。震度5以上を経験したことのある人はいますか（一人挙手）、一生に一度経験するかしないかですね。

しかし、現実には、地震が起きる可能性は高いわけです。そのような中で国レベルでは、やっと要支援者、すなわち障害者や高齢者の避難について指針が出始めています。地方自治体でも要支援者のためにどのような方法があるか検討して、要支援者の登録などの制度も始まっています。2005年に私たちのセンター（神奈川県障害者自立生活支援センター）が県から委託を受けて、『障害者のための防災マニュアル』を作りました。全国の市町村もいろいろな方法で作っているはずです。そんな中で障害者支援としてちょうど今日は、新潟中越沖の話としてスライドを用意しました。

実際に小千谷(おぢや)市の人口が41,000人、その半分以上が被災している。今でも親戚などに避難している人はいるけれども、最近聞いた話ではやっと仮設住宅から自宅に戻る

人が多くなって、仮設住宅がなくなって来ていると聞きました。その小千谷市の障害者が、身体障害 1,470 人、知的障害 204 人、精神障害 700 人で、合計 2,374 人。これは市の人口比率で約 5.5%。単純に日本の障害者は約 724 万人、総人口が 1 億 2,600 万人でその約 5.6%、と平均的なほぼ同じ比率になっている。これはだいたい全国自治体で同じくらい、神奈川県では寒川町位になりますね。小千谷市は。同じ比率と考えて良いでしょう。その 724 万人の内、60 万人が入所で残りの 664 万人 92%が在宅生活をしているわけです。震災で道路が使えなくなると、普段の生活が営めなくなる。普段から隣などに声を掛けあって生活している状況が大切になってくる。このような震災の状況は都会、特に神奈川県とかはかなりひどい状況になるだろうと言われています。

県ボランティアセンターの人もボランティアで現地へ行っていて、話を聞くと、避難所にはスロープなどが無くて車いすでは避難できないので、自宅に居る人が多く見られたと言っていましたね。今日お配りしたのは新潟県が肢体不自由者に被災後アンケートを取ったものです。とても大変な状況が伺えます。自分も災害に遭ったら家の中でジッとして縮こまっているだけになってしまうと思います。この震災では障害者の人はやはり家から出ない、一見、街は何とも無いようで建物も丈夫なのですが、実際は水や電気などのライフラインのない中で 1 ヶ月近くも暮らしていたそうです。ボランティアなどがバイクで来てくれたそうです。そんな中で作業所とか入所施設・病院などで障害者が生活するわけですが、約 60 人ほどで、残りの 92%くらいは在宅なのです。そのように在宅障害者にとって災害というのは問題になると言われています。

このように新潟の話聞いて学んだことは、今の要支援者・援護者という言葉は、少し前までは災害弱者という言葉を使っていました。弱者というのは要支援者・援護者からきています。それと学んだことの一つとして命の大切さ、どんなことをしてでも命だけは大切にしなければいけない、自分の命は自分で守る。それには最初に言った準備が必要になると思っています。それによって安心もするし、自分の生活もある程度守れる。それは命を大切にすることなのだと思います。

震災に遭って最初の 30 秒を自分で守る、そして 3 時間は近所の人による援助。阪神淡路のときも新潟のときも、9 割がた近所の人に助けられたそうです。1 割の人しか消防や警察に助けられていない。それは 3 時間以上立っていたからで、やはり早い段階での救助が必要で、住民の協力が必要だと感じています。次に 3 日間自分で頑張っていれば、その頃には行政が動き出して救助の範囲も広がって助かると聞いています。ですからその時には何が大切かと言うと情報です。我々が生きていく上でも確実な情報が必要です。やはり先ほど言ったように 3、3、3。30 秒、3 時間、3 日間を自分の中でどのように組み立て

ていくか、どのように考えていくか。こうなった時にはこうして欲しい、こういう状態になった時にはどういう介助をして欲しいかというのを前もって伝えておく必要があると思っています。所変わればいろいろあるのでサポートも支援も変わってくる。普段はベッドで生活していても、布団や畳で生活することになるかも知れない。その時には、このような介助でこのようにして欲しいのか、どのような支援が必要なのかということを近所の人に伝えておくことが大切だと思っています。それと支援される方になると、介助する方が「ああしなさい、こうしなさい」とボランティアの人たちなどが言うのがとても嫌ですね、介助する側ではそれをしないで欲しい。支援は押しつけないで欲しい、本人主体ということを考えて欲しい。災害時だからこそ、緊急時だからこそしっかり考えて欲しいと思っています。そのようなことが最後は自分のところに返ってくるのですから。災害は防ぎようがありません。でも再発・最悪は防げる、阪神淡路や中越沖地震の経験から、今日から、今からきちんと震災について向き合っていくことが大事になる。これを今日の問題提起としたいと思います。ありがとうございました。



小川：ありがとうございました。いろいろとキーワードが出て来ましたね。時間プロセスでの対処法、近隣との繋がり、あるいは情報がキーワードとして出て来ました。質疑応答は後にしまして、まずパネラーの方々からお話を聞いていきたいと思っています。

肢体不自由者の立場から震災対策を考える

みんなでつくる平塚 理事 山上 徳行 氏

山上と申します、このような席でお話しするのは照れくさいのですが、よろしくお願いします。私は車いすで生活しております。ですから要援護者になります。いわゆる災害弱者です。私たちが大きくクローズアップされたのは、阪神淡路大震災の時から災害弱者としてです。当時は自分もそれほど気にしていなかったのですが、だんだん自分自身の問題として捉えるようになってきました。その中で思っていることを話させてもらいます。

自助、公助、共助と言いますが、公助は自分ではどうしようもなく、行政の機関や、そのような公の機関や医療機関などいろいろなネットワークがなければなりません。それは大きな問題ですが、今日は自助、共助の具体的な話をさせてもらいます。

私たちは障害を持っていますけれども、自分たちでできることはあるだろう。また、自分たちでしておかなければいけないこともあるだろうと思います。そして、自分たちで実践する必要があると思います。まず何をしなければいけないか。地震は何時来るか分からない、明るい時に来るとは限りません。夜に来るかも知れません、お風呂に入っているときに来るかも知れません。もしそのようなときに来たらどうするのか考えておくことが大切だと思います。それともう一つはセルフ・ディフェンスと言われますが、自分で自分を守ること。そのためにはどのようにしたら良いのかということです。それでは私が実践していることをお話します。

私の家はちょっと見にくいのですが、正面の玄関からは勿論スロープになっていて、裏からも出られるようにしてあります。それから横にも出られるようにしてあり、3カ所4カ所と出られるようにしてあります。

もう一つ、地震が起きたときに死者が多かったのは、家具が転倒して亡くなった方が多かったようです。この写真を見て下さい、これは、私は本が好きなもので本棚ですが、本棚の上に空間があると倒れやすい。なので本棚の上の空間にちょっとした箱を置けば倒れにくい。突っ張り棒では天井に突き抜けることがあるので、このほうが良いと言われています。それで箱を置いています。写真には空き箱もありますが、空き箱だと殺風景なので、造花の葉っぱを置いてディスプレイしてあります。ガラスには飛散防止のフィルムが貼ってあります。下の写真は同じように棚の上に戸棚式の箱、ティッシュペーパーが入る程度ですが、天井と戸棚の間に置いて転倒防止にしています。このように家具の転倒を防いで、下敷きにならないようにしています。

もう一つ重要なのは水だと思います。一度 18 リットルの灯油用のタンクに入れておいたのですが、水が痛んでしまう、そして重たくて私には持てない。どうしたら良いか考えていたら妻が「ペットボトルに入れておいたらどうだろう」と。そこで1リットルのペットボトルに水を入れて、各部屋に2本から3本ずつ置いてあります。3本あれば3リットルです、3部屋ですと9リットルありますから、それ位あれば1日2日保つと思います。これは取り替える場合もペットボトルですので取り扱いやすく、各部屋に用意してあります。消火の場合には他にも消火器なども用意してあります。

もう一つは、各部屋に常備灯を備えてあり、私の部屋には持ち出しバックがあります。これも最初は作ったのですが「重たくてこんなに持って行けない」とやめたのですが、持ち運べなくてもわかるところにおいておけば必要な時に使えることもあると思います。そこで必要最小限のものだけ入れて用意してあります。

それからもう一つ、これは自分が携帯していますけれど、自分で作ったIDカードです。自分の住所氏名、連絡先、血液型、かかっている医者、飲んでいる薬、などを書いてあります。ですから地震の時だけでなく、交通事故などの時にも役に立ちます。外で災害にあって最低限度のことが分かってもらえるように、このようなものを持っています。

もし地震が起きてしまった時に行く避難所は、私たちにとっては避難所にはなりません。何故かと言いますと、テレビで見ている限りですが、あのような所で私たちが生活するにはトイレなど困難だと思います。だからこそ在宅避難ができるように、いろいろと考えて実践しています。家に居て家が潰れなければ、3日間在宅避難ができれば、外からの救助を待つことができます。しかし家が潰れなければ安心かという、そうではなくて在宅避難する場合でも、一番重要なのは近所の人たちです、要するに地域力です。ですから私が皆さんにお願いしたいのは、誰も死なない街を作っていただきたいことです。地震では助かったけど、独居高齢者のように仮設住宅で死んでしまったり、避難所が嫌で一人残って車の中で死んでしまったり、そのような悲しいことが無いように。せっかく地震で助かったのに何ものなりません。ですから、そのようなことの無い街にしたいです。それは災害が起きた時には支援者が支援者であるという保証はありません。支援者も要支援者もみんなが心がければ、命が守られるし、明るい街になるのではないかと思います。ですから誰も死なない街を作る努力をしたいと思います。

小川：ありがとうございます。山上さんのお話は、どなたの家でも共通する工夫ですね。

「在宅避難」という言葉が出ましたが、確かに避難所では障害のある方には生活しにくい、あるいはできない状況にありますから、それを維持する「地域力」が必要です。それから「死なない街づくり」という重たい話ですが、そのような街づくりが必要だというものでした。

聴覚障害者の立場から震災対策を考える

神奈川聴覚障害者総合福祉協会 事務局長 坂上 譲二 氏

私は一見障害者にみえないと思いますが、聴覚障害者です。坂上と申します。皆様もそうだと思いますが、社会は聴覚障害者がどのような手助けを求めているのか分らないと思います。ですから今日は、その辺りを含めてお話したいと思います。

私たち聴覚障害者が組織的に震災対策を考えるきっかけとなったのは、阪神淡路大震災からです。その震災後、聴覚障害者が十分なケアを受けられなかったということがありました。理由として情報の提供が十分ではなかったことがあげられます。食料その他の配給の放送が聞こえずに配給を受けられなかったということがありました。制度として聴覚障害者の情報保障を担う地元の手話通訳者も被災者になるわけですから聴覚障害者の情報保障が行えなかったということがあります。

日本ろうあ連盟という聴覚障害者の組織があります。その連盟のネットワークを使いまして、北海道から沖縄までの手話通訳者に協力を求めました。協力いただける手話通訳者に聴覚障害者、神戸の聴覚障害者の情報保障を行ったわけです。

ライフラインで一番早く復旧するのが、電気だと言われています。電気が通じればテレビを見ることができます。テレビを見ている市民の方は、テレビで多くの情報を得ることができます。しかし、聴覚障害者は音声放送では分らないのです。NHKの中で特に聴覚障害者のために放送されている手話ニュースがあります。震災時にその手話ニュースが放送中止になり、安否情報を流す放送に変わったのです。画面に人の名前が流され続けました。手話ニュースがなくなったということは、震災の状況、被害情報、どのような地震だったのかが、聴覚障害者には伝えられなかったのです。そういうことで全日本ろうあ連盟はNHKに抗議に行きました。結果として手話ニュースが再開されました。ただ、阪神淡路大震災だけではなく、今後起こるであろう様々な大震災のときに聴覚障害者への情報保障を考えていただきたいと申し入れを行ったのです。

一方、ろう者によるろう者のための放送を行おうということがありまして、全日本ろうあ連盟と、もうひとつ難聴者の全国組織である全国中途失聴者・難聴者協会、ある企業の3つの組織で障害者放送統一機構という組織を作りました。その組織の目的としましては、衛星放送を使って聴覚障害者に情報保障を行おうというものです。当然ですが、震災がいつも起こるわけではありませんので、通常は聴覚障害者を理解するための番組を放送しています。大震災が起これば、手話通訳・字幕を使った情報提供を行う放送になります。本来は民間でできることではないので、国が責任を持って行うべきものです。NHKも聴覚

障害者向けの 15 分の番組に専門委員会を設けて聴覚障害者の情報保障に配慮しているくらいですから、国はきちんと対応しないとおかしいわけです。聴覚障害者も NHK へ受信料を支払っているお客さんなのですから、国民と同様の情報保障を受けられるはずです。なかなか理解がすすまないで国レベルだけではなく、神奈川レベルにも話していく必要があると思います。

先ほどの鈴木さんのお話にもありましたように、避難所の問題ですが、聴覚障害者は外見からは分りにくい障害ですが、マスメディアの影響で手話が普及している現在、皆さんが手話を覚えていただければ、避難所での生活がかなり違ってくると思います。

もうひとつ、聴覚障害者は外に連絡する手段がないのです。私のように声を出せる聴覚障害者はとても少ないのです。ですから自身が生き埋めになっている近くを誰かが通っても、その音が聞こえない、助けを呼びかけることができないということもあります。ですから山上さんがおっしゃった「死なない街づくり」が大切だと思います。いろいろとございますが、とりあえずこのへんで終わらせていただきます。

小川：どうもありがとうございます。厳しいお話もありましたが、情報の共有ということ、またマスメディアの問題、とりわけテレビ等に対する情報量を増やす要求が明確に出ていると思います。皆さんに手話を、という話や被災している聴覚障害者の方のそばを通っても分からないという問題もありましたが、私はメディアの情報伝達の問題が一番気になりました。



視覚障害者の立場から震災対策を考える

神奈川県視覚障害者情報・雇用・福祉ネットワーク 新村 真紀 氏

ご紹介いただきました新村と申します。私が震災などについて考えるようになったのは、やはり阪神淡路大震災からです。その頃私のお腹には子供が居まして、慌ただしい空気の中、朝食をとりました。その時には何が起きたのかよく分かりませんでした。自分が同じ状況に立たされたら、子供が生まれて一緒にこのような状況で生きていかれるのか、とても心配になりました。不安になったことをお話します。地震が起きてしまったときには、私は全盲の視覚障害なので、普段歩き慣れている道は、完全に覚えている道であっても、地震によっておそらく道路や建物が崩壊していたりして変わった状況が想像できます。自分が杖一本で方向を決めながら歩くことができるのか、避難所に行くことが本当にできるのか心配があります。それと地震の時に、自分一人の場合もあるし、子供と一緒に二人だけの場合もあり、それが大きな地震だったら避難所に行けるのかが第一の不安です。

それから避難所というのは、先ほどからお話に出ていたように私たち障害のある者にとって、ちゃんとした避難生活ができる場所なのかという不安もあります。それは、避難所という所は一般的に体育館という広い場所ですよね、視覚障害者は広いところで目的のものを見付けることが苦手です。その中で自分のスペースをもらったとしても、そこから目的のトイレに行くことや配給を取りに行ったりすること、仮にインフォメーション等があったとしても難しいと思います。横に人が荷物を置いていたり眠っていたりしますから。自分で動けると思っても周りの人たちのことを思うと、杖で叩いたりしないか、傷つけたりしないか、という不安がありますので、大きな避難所には行かない方が良くないかと思います。それから掲示板に連絡事項が貼り出されても、見えない私には分かりません。それと品物配給の呼び込みがあっても、その場所に行かねばもらえないと思いますから、そこに簡単に行けない私には無理ですね。行けたとしても、時間が掛かりすぎて品物も無くなってしまうのではないかと、という不安があります。

いろいろ考えてみましたが、待っているだけでは何も解決しませんので、私たちは話すことができるので、周りの人をつかまえていろいろと聞いてみるのが大切なことだと思います。周りの人とコミュニケーションを取るのには、少し図々しくなって「自分はこういうことに困っている」ということを、アピールしていく。普段でも私たちはあまり自己主張することがありませんのであまり理解されませんが、災害などの時にはそれ以上に理解されにくくなりますので、自分はこういうことに困っていると声に出していく必要があると思います。周りも対応に難しいかも知れませんが。

先日、視覚障害者向けの支援グッズの展示会というのが錦糸町でありまして、その時に、私たちは触りながら好きなところに行くわけですが、自分の行きたいところに行けない。トイレに行きたいとか何かが欲しいという時には、「こういう物をヒラヒラさせて下さい」と入口で渡されたのですが。これがそうです(カードを会場に示す)、首にかけて必要な時にヒラヒラさせると、周りで待機しているボランティアさんがそれを見て声を掛けてきて誘導やブースまで案内をしてくれる。このように主催者がこのカードとボランティアさんを用意してくれたので、安心していられました。私たちはそのようには行かないかも知れませんが、このようなタグが良いのではないかと思います。

とにかく、一番大事なことは変に干渉をしないという条件の下に孤立をしないように自分なりに努力をすることではないかと思っています。私自身のことになりますが、子供が未だ小さいですから具合が悪くなったりするかも知れませんが、そのような時に思うように看護ができないかも知れません。そのようなときは素直になってお手伝いをお願いしようと思っています。

小川:ありがとうございます。阪神淡路大震災の時から対応を考えてこられたそうですね。今日はここに阪神淡路大震災の時に視覚障害者のために長期間に渡って援助をなさった方も来られていますので、後で経験などお話いただければと思います。今のお話では大きな避難所では、避難生活ができないのではないかと、掲示板も見ることができませんからね。行くまでの歩行の移動という課題と情報という課題が見えます。この2つの課題は他の障害においても出てくるものですね。それからキーワードで孤立というのが出て来まして、周りの人とのコミュニケーションを取り合う重要性が出て来ました。コミュニケーション手段の開発も考える必要があると思いますね。

知的障害児をもつ家族の立場から震災を考える

神奈川県手をつなぐ育成会 会長 依田 雍子 氏

ご紹介いただきました「手をつなぐ育成会」と申しまして、知的障害の子を持つ親たちで作っております会の会長を務めております依田でございます。今日は簡単な資料を付けさせてもらっていますのでご覧になっていただければと思います。

震災時に知的障害者はどうすればいいの？ということですが、私たちの会も知的障害といってもいろいろな障害があります。一つの例として、最近テレビなどでも話題になるダウン症という方は、一目見て障害のあることが分かりますが、一番困るのが先ほどの聴覚障害の方のように見た目には障害があることの分からない発達障害、自閉症の人たちもいます。今回はその辺のところを中心に話させていただきます。因みに私の子供は自閉性発達障害の息子です。

自閉系の人には苦手がいろいろありまして音や光、閉所。例えば、この部屋のように音がワーンと響くような所がすごく苦手、避難所に多い体育館のような所も同じですね。それと光などでも人の眼鏡がちょっと動くと反射して光ることがありますね、そのようなときにも喜びなのか不安なのか分かりませんが、ハイになってしまうことがある人もいます。それから食事とか寝具、トイレがいつもと全く違う、状況が違うということが苦手な人が沢山います。このような人たちが避難所に行くとどうなるのかと言いますと、避難所における恐怖の連鎖。とにかく状況の急激な変化で本人がパニックになる人が多いです。それが気になって、騒いだらどうしようとかこの子が迷惑を掛けるのではないかと親が不安になって、親がパニックになる。そうすると親が落ち着いていない状況を子供が敏感に察して落ち着かなくなってしまう、ますますパニックになってしまいますから、結論としては広域避難所で過ごすのは難しい人たちが沢山います。

しかし、どうしても広域避難所に行かなければならない場合に、こんな配慮があったら良いなというのを簡単に思いつくことを書きました。障害者対応のできる人、障害者専門ボランティアなどがいる専用のコーナーなどがあるとよいと思います。ここは障害者対応ですよとか、ここは医療対応の日赤の場所ですよとか、そのようなブースみたいなものがあり、その中に、障害者対応と言ってそこに行けば障害者に対応してくれる、例えば先ほどの手話通訳者とかガイドヘルパーなどが待機していて手当をしてくれる。ちょうど薬をもらいに行くのと同じように、障害者の困っていることに対応してくれる専用のコーナーがあると良いかなと思います。そこで全て問題が解決するわけではないけれども、そのよ

うなことで困っているなら、こうしたらどうですかというふうに何か指示を出してくれて、そこでは安心できるというような場所があれば良いと思います。

それから障害の特性に応じた薬品や医療品の備蓄が必要ですね。また、各種の表示物ですね、案内板とか、ハンドマイクをもって「どこどこに品物が来ましたから」というアナウンスにも工夫が必要かなと思います。しかし、これもパニックになりやすい人は、マイクなどで怒鳴られると耳をふさいで縮こまってしまう人もいますので、看板に書いてプラカードみたいに静かに歩いて回ってくれるとかしてもらおうと良いです。でもそうすると視覚障害の人には見えないからこれもつらいところですが、共通することは難しくて自分たちの障害だけ考えると駄目だと思ったりしますが、何らかの方法で表示物とかアナウンスの方法とか考えて、できれば全国统一してくれればありがたいと思います。そのような表示物などは市町村で防災倉庫に用意しておいて、いざというときにボランティアが慌てて手書きで書いたりするのではなくて、ある程度広域的に統一された物を常に用意されていて倉庫に置いてあるようにすることが良いと思います。

それから先ほどもありましたが、障害者専用の避難所があれば良いと思います。私たちの場合は当人だけではなくて親もパニックになる人もいますので。特に自閉症の場合は周りに迷惑を掛けるのではないかと、とても心配になります。普通の顔をしていて突飛な行動をとることがあります。例えば眼鏡が気になったら突然走って行って人の眼鏡をパッと叩いたり、光る物があると放り投げたりとかすることを目撃しています。そういうことで人に迷惑を掛ける心配があるので、2次避難所として自閉症の人には専用の避難所、たとえば養護学校とか各種障害者施設、通所施設などが用意されたら良いと思います。

一つ忘れていました。前のところで障害者であることを示すマークのようなものを希望者に配布するということです。先ほど新村さんが仰っていたようなものを希望者に渡して、うちの子にはとか私自身には、周りの人には分からないですが、このような障害がありますとか示して、分かって欲しいという希望のためにマークを、できれば全国统一のものがあれば良いかなと思っています。

長くなりましたが、私たちの場合にはハードの面よりもソフトの面で問題が解決することが多いので、今日の話の中では異質なものかも知れませんが、そのようなことをお伝えできれば良いと思いました。どうもありがとうございました。

小川：ありがとうございます。最後にソフト面という話になりましたが、今回の企画ではどちらにも重きを置いて皆さんにご意見をいただこうと思っております。避難所での話で

特段の配慮が必要であるということですね。例えばこの神奈川工科大学が避難場所になれば多くの建物がありますから、場合によってはそういった障害特性に応じた施設提供ができるでしょうが、事前の準備が必要で何にでも利用できるというのではなくて、障害特性に応じた配慮も必要になると思います。この後は、身体的な障害以外の方々に精神障害、高次脳機能障害、などの関係者の方も来ておられるので、皆さんにご意見をいただいて整理していきたいと思っています。



第二部

フロアとの情報交換

◆ 指定発言 自閉症児をもつご家族

在日されている外国人の方とご家族

精神障害のある方、関係機関の方

高齢者福祉に関わる方

そのほか、震災時などに弱者となる可能性のある方々や支援者

◇ コーディネーター 小川喜道 人間福祉・健康科学コース教員



小川：それではディスカッションに入ります。1時間ほど皆さんとお話ししていきたいと思います。今、鈴木治郎さんと4人のパネラーから報告を受けたわけで、それぞれにお聞きしたいこともあると思いますが、今日は様々なお立場の方が参加してくれていますので、聞きそびれないように私から指名で回して、その後にフリーでお話していきたいと思っています。

視覚障害の立場から話を新村さんにさせていただきました。そこに移動と情報の話が大きな課題として出ていて、コミュニケーションの取り方を考えないといけないという話も出ていたのですが、阪神淡路大震災の時にボランティアの活動がクローズアップされてきました。その震災の時に視覚障害者の支援、ボランティアの指導というお立場にもあったと思いますが、当時、リハビリテーションセンターにお勤めだったAさんからその時の経験をお話願います。

Aさん(元阪神淡路大震災ボランティア)：もう13年前になりますが、今日のお話を聞いていてなるほどと共感しました。阪神大震災は都市型の震災で、実際に視覚障害者の方がどうなっているのか分からない状態でした。そこで人海戦術といいますか、人を施設や避難所をどんどん回ってもらい、視覚障害者の数を把握することから始めました。やはり避難所での生活は視覚障害者にとって辛いものでしたね。というのは視覚障害者の場合、バリアがあっても分からない、ましてや人が多くてざわついていて聞き取りにくい、一番困ったのはそのようなことです。それから大きな体育館ですから大勢いて、廊下にも沢山の荷物が置いてあり、ましてや、すれ違える状態にないので動きも取りにくい。それから、先ほども出ましたがボランティア自身も被災者になっていて、我々関係者もそのことに気を遣って活動して、他の人を探したりして支援活動をしていました。冬の震災でしたが、夏までには形が整ってきました。やはり大事だったのが近隣の人とのコミュニケーション、自分はここに住んでいるんだ、自分が生活している、存在していることを周りに伝えていくことが大事です。

小川：はい、ありがとうございます。視覚障害だけでなく障害者全般で同じようにケアの活動をしていたのでしょうか。視覚障害者の方たちにとってザワザワした空間の問題だとかトイレの問題がお話に出ましたが、新村さんから反対に聞いてみたいことはありますか。

新村：そうですね、実際の状況は分かりませんが、トイレの問題で廊下とかトイレに行き

たいという時に、かえって他の情報から孤立してしまうようなことはないでしょうかね。

Aさん：それは確かに、情報というのは掲示板にいろいろ書かれているんですよ。掲示板が見えないという問題があります。あと放送といってもザワザワしていて、そのことに耳を集中していますが、大変です。その方は辛い経験をして最終的に親戚の家に行きました。

小川：全般の放送を入れるだけではなく、必要な人に必要な情報が伝わるような配慮を考えなければいけない。この件で他にご意見、ご質問はありますか。

坂上：聴覚障害者の組織である地元の聴覚障害者協会、神戸の聴覚障害者協会ですね。その組織の役員が各地に設けられた避難所を回り、そこに避難している聴覚障害者を探したのです。そしてその聴覚障害者を神戸ろうあハウスという所に集め、全日本ろうあ連盟、手話通訳者を中心に情報提供や食料の配給を行ったのです。普通の避難所での生活は聴覚障害者にとっては厳しいものがあるので、障害者専用の避難所を設けるべきだと思います。阪神淡路大震災ではこのような取り組みをしてきたのです。

小川：はい。今度少し角度を変えまして、在日されている外国人の方が日本語の情報だけではいざ災害時となりますと、難しいと思うのですが、**Bさん**から、来日されて、どのようなことに困ったか、あるいは旦那さんがいつも側にいれば良いのですが、一人の時もあるでしょうから、そのようなときは心配ではないか、いざ地震などが起きたときの心配などを話してください。

Bさん(在日の外国人)：こんにちは **B** です、マレーシア人です、よろしくお願いします。地震のことはあまり心配ではないです。マレーシアは地震がないから地震はあまり知らない、地震の怖さもよく分からない。あと、みんなの話を聞いたら外国人は目の見えない、耳の聞こえない人と同じような気がすると思います。地震が起きたらラジオ放送を聞いても分からない、テレビで文字の表示をしても読めないと思います。あと、避難所が分からないし、避難所に何を持って行けばよいのか分からない。それから幼稚園に行っている子供を迎えに行っても会えるのか、主人に会えるのか分からない。もし避難所に行っても私の国とは違うので日本の常識がない、という問題があると思います。

小川：Cさんは日本語教室でいろいろと教えていらっしゃるでしょうから、そこでの経験を、Bさんのお話に何か付け加えていただけますか。

Cさん(日本語教室ボランティア)：私はTセンターという所で日本語を教えているのですが、Bさんはとても早く日本語が上手くなりました。韓国人や中国人は漢字があるので割合早いのですが、ヨーロッパや東南アジアの人は日本語の取得は難しいので、災害が起きたときに分からないということが不安ですよね。厚木市でもそのようなことがあると各言語でインターネットを使って送っているらしいのですが、それを言語に壁のある人には分からない。そのようなことでもう少し手厚い保護があったほうが良いのではないのでしょうか。マレーシアなどは地震がない国なので、体験したことがありますから分からないことが沢山あると思います。そういうことで私も心配しています。

小川：ありがとうございます。今、Bさんが視覚障害の方、聴覚障害の方と似ているかも知れないと言われていたので、Dさんに振ってみようかと思いますが如何でしょうか。理解困難ということで日本語の問題、日本の常識と言われてましたが、日本の慣習、日本の普段の習慣が分からないことがあります。それに加えておっしゃったのは、どういう対策があるか分からない、市などの支援がどのように行われるのか分からないというお話でした。視覚障害の方、聴覚障害の方にとっても避難所の情報やその後の対応にしても、そういった情報が届いているのか心配になります。Dさんから何かコメントはありますか。

Dさん(聴覚障害)：厚木市の聴覚障害者協会から参りましたDと申します。坂上さんが言われた通り、自分の力で乗り越える又はお互いに助け合っていくことが大切だと思います。手話の普及と言いましても普及はまだまだですし、理解をしていただければ良いのですが、今から理解の普及をしていきたいと思っています。簡単で申し訳ありません。

小川：いえいえ。それでは続いて日常の生活でリズムができている時は良いのだけでも、あるいは、いろいろな配慮があったり環境が整備されている場合は良いのですが、いざ非常事態になって生活の仕方が変わると困難になると思われる、例えば自閉症のお子さんとか交通事故等で高次脳機能障害を負った方だとか、あるいは精神障害をお持ち

ちの方などは、いざこのような時に困難を感じるのだろうか、それに対してどうしようと考えているのか聞いていきたいと思います。まず最初に、自閉症児者親の会の E さんからお願いします

E さん(自閉症児のお子さんをもつ家族)：自閉症の子供を 2 人持っています、一人は中学 2 年生 13 歳と 16 歳の高校 1 年生。大変な状況の中に身を置かなければならないわけで、変更とか変化が苦手です。意味を理解するのは最も難しい、自閉症の子供にとっては地震というのは大変な思いをするのは目に見えています。それぞれの障害の方のお話を聞いていて、それぞれの障害の方が不便だと感じる事柄は、自閉症の子たちも同じように感じるのではないかと、聞いていて思いました。例えば、視覚障害の方が普段歩き慣れた場所であっても、震災で変わってしまった場所を歩けるかとても心配と仰っていましたが、やはりうちの子も普段から歩き慣れた場所も変わってしまったとしたら、歩けなくてその場にたたずんでしまうのではないかと思います。聴覚障害の方の話でも、意味を理解するのが難しい、放送などが耳から聞こえてもそれを理解して行動することはとても難しいので、耳からの聞こえただけでは動けないと思います。在日の方の話は全て当てはまるな、と思いました。日本人でありながら日本語を理解するのは難しいです。自閉症の方を理解するときによく言われるのは、アメリカに行ったときにボツンと一人で周りのみんなが英語で話しかけてくるのに何を言われているのか分からない。そういう状況に似ていて、怖い思いをしているとよく言われます。今、震災が起きたときの避難場所は、普通のところは難しいので、県にお願いしてあり、それなりに防衛しています。それと日頃から、車のガソリンが半分以下になると満タンにするように心掛けていたり、食料も避難場所では配給を受け取るのが難しいので備蓄して、好き嫌いやどういったものが食べられるということもありますので、種類はビスケットやレトルト食品。震災用の食料は値段が高いので、市販のビスケットで代用するとか、レトルトのお粥、レトルトですから温めないと美味しくはないのですが、開けて食べられるものを用意しています。後は普通に防災用品。うちの子を落ち着かせるためにビデオを見せるのにポータブルビデオとバッテリーを用意しています。今日はこういう場所に出させていただいて、自閉症の子供というのは、親や支援者がその子に対してどれくらい支援する引き出しを持っているかが鍵になりますので、いろいろな障害の方の話を聞いてやってみようというのがあってとても勉強になりました。

小川：自己防衛ということで 1 ランク上の用意をなさっていらっしゃいますね。もう一方

で支援者がどれくらい引き出しを持っているか、というドキッとするような発言もありましたが、F さんはいかがでしょう。

F さん(自閉症児のお子さんをもつ家族)：今、E さんが話していただいた気持ちで私も過ごしていたので、ほとんど同じですが、目が見えない、耳が聞こえないという方がいらっしゃる中で、自閉症をもつ人は両方とも機能しながら充分にそれを使えない。情報が分かっているけどそれをちゃんと理解して、自分の中で状況判断することができない。うちの子は字も読めないし、知っているのだけれど他の人と同じような意味で捉えていません。他の障害に関して言えば、目が見えない方には、目が見えないであろうというサポートが割合似ていると思うのですが、自閉症というのはそれぞれ一人ひとりの特性が違いますので、それぞれサポートが難しい障害だと思います。先ほど E さんが言っていましたが、備蓄の中の食料もうちの子は偏食があってカップラーメンもあるメーカーのものでないと食べられないとか、78 円の安いカップラーメンなのですがそれでないと完食できない。そのようなこともありますので、サポートというのも周りの人が気付かないような点があり、味覚や嗅覚、触覚などいろいろな面でこだわっていることもあり、独特のものがあって避難所での生活は厳しいです。できれば避難所の生活ではなくて例外として自分の家での生活も認めて、そこで生活して、親も自由にトイレに行けて、自分の好きな物が沢山あって環境が変わらないようにする自宅対応でできる避難を行政が認めて下さって、そういう方に対しても支援物資が滞らないような避難生活が将来できるようになったらなと感じました。

小川：ありがとうございました。避難所にそれぞれのお子さんの特性にあった備品、飲食物と言いますか、カップラーメンやポータブルビデオが無かったらと思うと大変ですよ。個別対応のできるようにすることも考える必要があるのかもしれませんが。次に高次脳機能障害のご家族に、もしこのようなことが起こったら、というお話を伺いたいと思います。G さん、お願いできますか。

G さん(高次脳機能障害者の地域作業所所長)：NPO 法人脳外傷友の会ナナの G です。私自身は昨年度よりナナの会が設立しました厚木市愛甲にあります高次脳機能障害ピアサポートセンターの施設長をさせてもらっています。私からは全体的な話として高次脳機能障害を持っている方々の災害時にはどうであろう、外から見えにくい高次脳機能障害について話したいと思います。まず失語と言って言葉を失っている方は、災害時に自分に何が必要か、どうしたいのかを話すことができません。周りが行ってい

ることが理解できません。遂行機能障害を持った人は災害時の避難行動や安全行動ができずどうすればよいか分からないので来られない。地誌的障害の方は自宅と避難所の位置関係や道順がわからないという方もいらっしゃいます。判断力の欠如で災害時に安全な所に行く判断ができない人もいます。もう一つは感情の抑制ですがパニック障害で自分の感情をコントロールできない。高次脳機能障害はその他にもいろいろな症例がありますが、災害時に起こるであろうということを話しました。それで、そのような方が何処にいるのかわからない時に起きる災害の対応については、まず支援施設が必要でしょう。災害時施設が利用できる状態であれば、支援施設の備蓄を使ってライフラインが確保されるまでは、よく理解している専門職員の対応で施設内避難が一番望ましいと思います。二つ目は支援センターが利用できなくなった場合には、職員と共に避難所に移動して、必要な支援は職員を通して避難所の周りの人たちに理解を求めていくことになると思います。在宅避難ですが、高次脳機能障害に対する周りに暮らす人々の理解が必要になってきます。私たちはいつもの活動が地域の自治会を中心に理解を求めていっています。



小川：ありがとうございました。高次脳機能障害の説明があったのですが、言葉を失って難しいとか、地誌的認知とか、障害を理解することがとても難しいですね。避難する場所によっていろいろと話していただきましたが、家族の役割というのも重要ですね。引き続き伺っていこうと考えているのが精神障害の当事者の方、あるいは精神障害の方を支援している方です。避難などの話であまり話題になっていませんが、今までのお話を聞いての感想とか、お考えがあれば伺いたいと思います。Hさんお願いします。

Hさん(精神障害当事者):私は障害者自立生活支援センターに通っていますHと申します。統合失調症という病気を抱えています。統合失調症の中には躁鬱病や鬱病も隠れてい

るので複雑ですが、精神障害として地震や災害について話していきます。まず、一目では精神障害であっても分からないことが問題になってきます。私は手足も目も耳も全部自由で不自由な点はありません。精神面だけには不自由な点がありまして、例えば集団生活、今こうして大勢の前で喋っているときも緊張して一杯いっぱい状態です。それでまず、地震が起きたら薬がないと私は生きて行けません、精神不安定になってしまうので精神安定剤がないと。もし避難所に行ってそれがあれば良いのですが、集団生活の中では暗くなると不眠症の症状が出ます。眠れなくなると眠らなくては行けないと興奮気味になる。あとは手足の震え、今も手足が震えているんです。このように薬がないと生活できない私が集団生活をやっていけるか、とても不安が私の中では一番大きな問題です。どうやったら精神障害という障害を持ちながら一人で何処までやって行けるのか。掲示板を見るにしても長時間掲示板を見るのが難しい、集中力が欠けているので長時間集中できない。必要な情報を得る前にあきらめてしまう、そうすると必要な水や食料も手に入らなくなることになり、やはり家族と一緒にまたは理解してくれる周りの人がいないと駄目になる。あとは避難所に行く場合に、体質的に疲れやすい身体なので、長時間歩いて行けるかどうか、生き続けられるかどうかという不安もあります。そういった点で精神障害の場合は、困った点があります。



小川：ありがとうございます。集団生活の不安というのは対人関係が上手くいっている場合には問題ないと思われれますが、そこに壁があるとどの障害であっても、にわかに作られた大集団の中では難しいと思われれます。それに加えて集中力とか持久力などが低い状態で、緊張した状態に置かれてしまうと、精神障害の方には余計に厳しいですね。そのようなことに関してIさんからありますか。

I さん(精神障害者支援機関職員)：新潟地震の時に薬の問題が上げられました。病院には入院の方の分しか無くて配給することができなかった。新潟の場合はP S W(精神保健福祉士)協会から県を通じて全国に薬の援助を求めました。また、何という薬欲しいのか、自分が今何という薬を服用しているかを書いて病院にすれば対応するというものでした。また避難所生活で環境変化のストレス、対人関係のストレスに対応することが大切で、コミュニケーション不足でストレスが溜まってしまって体調を崩す。それを解消するための対応をするために、心のケアセンターというもの設置して、そこでは医療相談だけでなく心理面や心のケアにも対応するものです。そこには当事者だけでなく家族や他の被災者も心のケアを、特にP T S D(心的外傷後ストレス障害)などの対応もしていました。

小川：ありがとうございます。過去の経験というものを充分踏まえなければいけないと思いますね。避難場所、療育の問題、心のケアなどの問題をどうやって解消してゆくには、どこがどうやって行動して行くのかということだと思います。今、在日の方、高次機能障害を支援している方、精神障害の方などのお話を伺いましたが、依田さんからお感じになったことをお聞きします。

依田：これは藤沢市の例なので他でやっているのかどうかは分かりませんが、以前から藤沢市障害施策検討委員会というものに入っている時に、防災に関してたまたま藤沢市内には3障害、今、障害者自立支援法になって身体、精神、知的の3障害が一緒にやっ行くことになったのですが、それ以前から藤沢市にあった3障害ネットワークというのがありまして、それぞれが社会福祉法人格を持っていて運営をしていたものですから、そこを何とか2次避難所に指定登録して欲しいと申請し続けていました。数年前までは市から「地域の統一避難場所として地域住民に施設を開放して欲しい」という打診があったらしいのですが、障害に特化した場所とは捉えられていなかった。それがここに来て、障害の入所、通所施設や県立の養護学校もネットワーク化して、2次避難所のネットワークを作る話になっています。細かいところはまだ詰めて行かなければならないのですが、障害に特化した2次避難所を用意して障害者に開放する。それは自分の家の近くにある施設に通ったり入所していなくても良いのです、自分の希望する施設を聞き取るアナウンスをこれから市がそれぞれの障害者のところに行くそうです。それで障害者自身が希望する所に1カ所に集中しないように微調整はあるでしょうが、避難できる方策を市が行うというところまで来ました。そうすれば、視覚や聴覚障害だけでなく知的や精神の人も薬の心配がいない避難ができるよう

にして欲しいと考えています。ですから、皆さんで一緒になって安心して避難できる場所を決めてもらえるようにしていきたいと思っています。

小川：ありがとうございます。公的なシステムづくりも精力的に進めて行かなければいけないので、依田さんはその先頭に立っているだろうと思います、これから力を注いで行くというお話でした。今までに話の出ていなかったのが高齢者の話、人口分布から言えば俄然多い高齢者の方のことについて K さんにマイクを回します。民生委員を長く務めていらっしゃったので、高齢者の方の地域での生活を見てこられて、近隣との交流などで取り組みをしてこられたと思うので、高齢者と災害、震災について何かありましたらお願いします。

K さん(元民生委員)：厚木の一地域で 7 年ほど民生委員をやっていました。厚木市での高齢者率が一番高い地区でした。ここで一番気になったのは防犯と防災。今でもやはり気になることがありまして関わっていけたら関わっていききたい、手伝えるところを手伝っていききたいと思っていますけれども。やってきた中で今回は防災のことを話したいと思います。高齢者の方たちで問題は災害弱者、その中で介護保険を使って生活をしている人と介護保険を使わないで家族だけでやっている方もいます。介護保険を使わないでやっている人は地域との繋がりが少ない傾向です。民生委員として訪問しても民生委員は入れてくれるが地域の方は駄目だということで、なかなか入って行けない。こういう人たちを災害時にどうしたらよいか考えた場合、高齢者の中には弱者と言われる立場の人も多い、生活的な弱者と災害の弱者。その人たちは、あまり地域と関わっておりませんので、最近 2 年ほど前から私たちがやってきたのは、具体的にドアに印を付けてくれた家には入らない、家に入られるのが嫌な人が印を付けた家には入らない、大丈夫ですよというように印を付けてくれた家には入らない。反対に印のない家には入って行って援助をすることにしました。実際に厚木市の 2 カ所地域ではこの方法でやりました。この印というのは安いものでいいから、黄色の鉢巻きみたいなものでいいからドアに付けてもらおう。そのような提案をして地域のルールにして実際にやりました。最近の災害弱者、障害の方、高齢の方にそのようにしてもらおう。障害の方、高齢の方で避難時に協力が必要な方全員にそのようなことをしてもらおうとよいと思っています。このようなことを自治会の役員が積極的に提案して行って欲しい。行政が目を向けるのは住民や自治会の声が大きいところが早いからです。

小川：ありがとうございます。個人情報保護ということで、なかなか安否確認がしづ

らいということで要援護者の登録制度というのがありますが、今の話は何らかの形で印を付ける、ご自身から意思表示を行うということで大きな事故を無くす手段の一つだと思います。それぞれの地域で話し合っどどのような手段がプライバシーも保護され、援助につなげるのがよいかを決めていく。もう一つは当事者の声を地域の自治会等を通じてどんどん発信していくのが良いということでしたね。他にもいろいろと話がしたかった方もいらっしゃったと思いますが、時間が迫ってきてしまったので前に座っておられる方々には先ほどご自身の立場からお話いただいたのですが、いろいろな角度から沢山話を聞いて感じたことを先ほどの話より広げてお話いただいて終わらせていただきます。先ほどと同じように山上さんからお願いします。

山上：先ほどお話ししましたが、障害が違ふことによって全て支援して欲しい方法が違っていることは頭では理解しているのですが、もし避難所に行ったりしたら支援の仕方がすごく難しいなと、自分自身がもし支援する立場になったらどうなるだろう。先ほどお話しした地域で生活をするのが一番良いと思って話しましたが、支援する方の家だって地震が来れば被害も受けるでしょうし、必ずしも自分が支援できる立場でいられるとは限らず、逆に支援される側になってしまうかも知れません。そうするとお互いに助け合おうという気持ちを地域で持つことが必要だと感じました。

私は避難所が大きな問題で、公共施設に避難するのが良いと思い、施設側に話した時に、施設では「うちでも利用者がいるし、その人たちの対応で手一杯で外からの人たちをみることはできないのでいらっしゃいとは言えない。でも軒先を貸す程度ならできる」と施設長さんの話でした。現実はその程度なのです。ですからどうしたらよいのか、学校の体育館だけに避難するのではなくて、保健所や美術館などで日中使用していても大丈夫だろうという場所を貸してくれないかなと思いました。頭の中で考え、口で言うのは簡単ですが、それを実施するにも地域の力が無ければできない。普段は自立生活をしていても、災害が起きた時には自分だけではなにもできません。地域の方の力を借りたり、理解を得ておくことが大切だと思います。けれども、その壁を取り払うのも大変だということがよく分かりました。そのためにも私たちが声を出して行くしかないかな、あるいは地域の人に理解をしてもらって一緒に声を出して行く必要があると教えられました。ありがとうございました。

坂上：障害者権利条約が国連で採択され、障害者の範疇が広がっています。ですが、障害者同士で互いを理解しているのかというとそうでもありません。過去、障害者の集

約した組織である日本身体障害者連合会から各障害者団体が脱退したということがあります。

しかし、差別を禁じた障害者権利条約の採択により、障害者組織の集約が始まりました。JDF といいます。日本障害者フォーラムです。お互いの障害を理解して取り組もうという考えになっています。このような活動を神奈川レベルまでもってきて、震災対策に取り組む必要があります。皆様と力を合わせて取り組む必要性を痛感しました。今回の集まりで障害の異なる皆さんの意見が聞けて、非常に良かったと感じています。以上です。有難う御座いました。

新村：皆さんの話を聞かせていただいて、やはりそれぞれの障害によっていろいろなことが変わっていることが改めて感じました。それでもその中で、例えば視覚障害者だけでなく他の障害でも、もしかしたら高齢者でも聴覚障害でも使えるのではないかと、いうこのカード。これは色が控えめな色で目立たない、これを振っても何処まで分かってもらえるのかと聞きましたので、こういったことも、災害時に全国的に統一して、知らない人にも対応できるように自治体などに保管しておいて、何時でも使えるようにしておくの良いのではないかと思います。それから個人情報になるのですが、どうしても普段、障害のあることを人に知られたくない、見せたくないという障害者や障害者家族も多いと聞きますが、災害時にはそんなことは言っていられない状況になるのですから、頭でしか分かっていないわけですが、とにかく死ぬか生きるかの時に秘密にしておく状況ではないと私は思っています。その時に各自治体がサポートしてもらいたい障害者のリストを作っているところもあるようで、ちなみに私の住む横浜市に聞いてみたのですが、横浜市では「各区にその事業は任せているので、もうでき上がっているのではないのでしょうかね」と言われたので、私の住んでいる A 区と勤めている H 区に聞いてみたのですが、とんでもない話でした。H 区では施設障害者のリストは完成しているのですが、A 区では「全くできていません、今の段階で」と。市は区に丸投げ状態で、区ごとに状況は変わっていることが改めて分かりましたので、これも全国的に統一して、何時までにどのような方法をどのような順序で進めるかを、ちゃんと決めていただいて、いつ災害が起きても対応できる状態にして欲しいと思っています。今日は貴重なお話を聞かせていただいてありがとうございました。

依田：今日私からお話しさせていただいたのですが、大変なことを忘れていました。例の障害者であることを示すマークのことです。いろいろと言いたいことはあるのですが、ここのところを最後に強調しておきたいと思います。先ほども新村さんとも話したの

ですが、カードの「色は何色ですか」と聞かれたので「あまりパツとしない色だな」と言ったのですが、思い切って黄色か何かの蛍光色で夜でも見えるような物で全国统一してみても、と思いました。もともと私は自閉症の親で、ちょっと目を離すと何処に行ってしまうか分からない子でした。ですからアナウンスを聞くことができて、掲示板を見ることができて、そこへ行けないのです、子供のことが気になって。捉まえて手を引っ張っている時にはもう配給の物が無くなっている、そうなるのではないかと心配していることがあります。ですから、「ここに障害児や障害者がいます」と分かるように、それが暗くなっても大きな声を出さなくてもいいように。例えば、体育館の中で電気を消してみんなが寝静まっている時にも、蛍光で見えるようにしておけばそれを振っているとボランティアさんが来て見てもらえるのではないかと、そういう物があって支援を求めていることを知らせるようなものがあればいいと思います。それは家が壊れてなかなか家から出られないとか、安否を警察などが確認に来たときにも、声を出せない人や出せない時にも、それが全てを解決するわけではないけれど、それを振れば「ここに生きている人が居る」と分かるような、それも全国统一のものがあって、全国放送、NHKなどで「今度全国でこのような物ができました、皆さんはこれを見た時には気を付けて下さい」と知らせていく。そのようにアピールする物ができたら良いなとつくづく思った次第であります。今日は本当に勉強になりましたし、いろいろと得る物がありました、ありがとうございました。

鈴木：神戸の震災でも問題になったトイレ、これを解決するにはおむつ。紙おむつはとても便利です。話に出ていた「文字を使わないでやっていこう」ということで我々障害者の防災は、全国统一した印で黄色は要援護者、緑はボランティアにして避難所でそれを身につけておけば良いのではないのでしょうか。沢山の要援護者をまとめたり、ボランティアを配置するには地域のリーダー、地域を担う防災のリーダーを要請する必要があります、横の連携がないと進まないし、解決できない問題もあるからネットワークを作る必要もある。そして普段の生活から心掛けていないと問題は解決しないと思います。

小川：ありがとうございました。山上さんの言葉を使わせてもらって、自助、公助、共助、というところが話の中身だったと思います。自助は皆さんのお話から沢山のヒントがあったと思いますので、今後それらを少しずつ拾っていきたいと思います。
皆様、ありがとうございました。

資料

1. 山上氏 配布資料 <公助・自助・共助>
2. 山上氏 配布資料 家具の転倒防止とガラスの飛散防止
3. 山上氏提供 『もしも…の時のために Vol.3 ヤマさんのお宅を拝見』
4. 依田氏 配布資料 震災時に知的障害者はどうすればいいの？
5. 厚木市「災害時要援護者支援制度」
6. 神奈川県障害者自立生活支援センター『障害者のための防災マニュアル』表紙・目次
7. 日本自閉症協会『自閉症の人たちのためのハンドブック』
<http://www.autism.or.jp/bousai/index.htm>

＜公 助・自 助・共 助＞

「災害時の要援護者からの問題点」

- 「要援護者」とは誰ですか？
- 「要援護者」は何が不安で、何を必要としているのか？
- 「要援護者」は誰が守るのでしょうか？

① 公 助 ＜個人では出来ないこと＞

- ✧ 行政とのネットワーク
- ✧ 医療機関とのネットワーク
- ✧ 地域とのネットワーク
- ✧ 避難所の諸問題

② 自 助 ＜個人で出来ること＞

1 地震をイメージしてください

地震は明るい時にくるとは限りません。もしこんな時に地震が来たらどうするか、

頭の中でその時の自分をシュミレーションする。

2 セルフディフェンス（在宅避難）

- 避難口の確保、家具の転倒防止、非常持ち出し品のバック（下着・3日分の薬など）
- 防災グッズの確認（手巻きラジオ・自分のIDカード、笛、ペンライト）
- 各部屋に常備灯、1リットルのペットボトルの水（三本くらい）を設置する。

③ 共 助 ＜地 域 力＞

- 災害時に必ずしも「支援者が支援者であるという保証はない」と言うことです。
- 一番大切なことは、ひとりも死者を出さない地域を作ることです。地域間の連携をつくることが、まちづくりになくてはならないものだと思います。
- 災害時の要援護者にとって避難所に行くことが大変です。「在宅避難」ができるためには「地域力」がなくてはなりません。

家具の転倒防止とガラスの飛散防止



転倒防止箱とガラス飛散防止フィルム





発行・連絡先

神奈川工科大学 創造工学部
ロボット・メカトロニクス学科
人間福祉・健康科学コース
小 川 研 究 室

〒243-0262 厚木市下荻野 1030
TEL 046-291-3153 FAX 046-291-3262
e-mail : ogawa@rm.kanagawa-it.ac.jp
URL : <http://www.we.kanagawa-it.ac.jp/~ogawa/>

印刷

身体障害者授産施設・貴峯荘ワークピア
〒254-0064 神奈川県平塚市達上ヶ丘 1-9
TEL : 0463-31-0617 FAX : 0463-32-1177
e-mail : kihoso-w@vesta.ocn.ne.jp
